

## 永遠の今の自己限定

## 一

聖パウロスの「時が完了せられた時、神が彼の息子を送った」といふ語に對し、アウグスチヌスが時の完了とは何を意味するかと問われた時、時が無くなることであると説明した。かかる誕生には時といふ如きものはなくならなければならないのである。併しマイステ・居る・エックハルトの云ふには、時の完了といふのは尚一つの意味がある。時及び幾千年かの間、時に於て起った又起るであらうものを、現在の一瞬に引寄せることができれば、それが時の完了といふものである。それが永遠の今といふものであって、そこに於て私が今物を見、音を聞く如く、新に鮮かに万物を神に於て知ると云ふことができるのである(Meister Eckhart, Von der Vollendung der Zeit)。プラトンはティマイオスに於て創造者が創造物に永遠性を付與することの不可能なるを見て永遠の動く影像を作った、それが時であると云つて居る。プラトンがそこに永遠なるものと考へて居るのは生ぜず滅せざるもの、即ち時を超越したものを意味して居るのであらう、永遠にあるものとして、変ずるものの始となり終となるものを意味して居るのであらう。そこでは過去もなく未来もなくすべてが現在であると考へることもでき、又過去も未来も同時に現在に於てあると考へることもできるかも知れぬが、寧ろ時といふ如きものを超越して時といふ如きものがその意味を有たないと考へべきであらう。永遠の今 *nunc aeternum* と考へられるものは、エックハルトの云ふ如く無限の過去と無限の未来とが現在の一点に於て消されると考へられるものでなければならない、神は創造の始の日の如く今も尚世界を創造しつつあり、時はいつも新たに、いつも始まるといふ意味でなければならない。

時とは固如何なるものであり、如何にして考へ得るものであらうか。時とは無限の過去から無限の未来に向って進み行く無限の流と考へられる、直線的進行と考へられる。併し未来は未だ来らざるものであり、過去は現れたるものといえどもそれは既に過ぎ去ったものであり、加之我々は何処までも過去の過去を知ることはできない。我々は唯現在を中心として過去未来を知るのほかはないのである。現在を中心として記憶によって過去と結合し、未だ来らざるものを予感することによって、過現未の関係が成立すると考へることができる。即ち現在に於て過ぎ去ったものも未だ過去として終らざるものがあり、未だ来らざるものも既にその尖端を現しており、現在に於てあるものが既に傾斜を有つて居る、否現在そのものが過去から未来への推移であるといふことから時の関係といふ如きものが考へられるのであると思ふ。併し変ずるものが知られるには変ぜざるものがなければならない、現在を中心として無限の過去、無限の未来といふものが考へられるには、無限の過去、無限の未来に通ずるものがなければならない。アウグスチヌスの如く過去、現在、未来といふものがあるので

はなく、過去の現在、現在の現在、未来の現在といふものがあるのであり、現在が過現未を包むといふことができる。併し時が現在に於てあるといふことは時そのものを否定することでなければならない、時が何らかの意味に於て包まれると考へられる時、それは時といふものでなくならねばならない。時は無限の流れでなければならない、而もその方向は絶対に翻すことのできない永遠の流れでなければならない、時は一瞬の前にも返ることができないと考へられねばならない、時の無限の行先と考へられるものが何らかの意味に於て包まれると考へられる時、時は繰り返し得るものとならねばならない。時は単に一定の方向を有つた連続といふ如きものではない、時の行先は包むものの外に出て行かなければならない、如何なる意味に於ても對象的に限定せられるものの外に出て行かなければならない。時の尖端は一瞬一瞬に消え行くものでなければならぬ、そこに時は永遠に返ることができなといふ意味があり、そこに現在はつかむことができないといふ意味があるのである。アウグスチヌスの如く時は現在に於てあると考へねばならぬ、而も斯く考へる時、時といふものはなくなるのである、時は自己自身に於て矛盾するのである。如何にしてかかる時が自己自身を限定すると云ひ得るであらうか。

すべて有るものは何等かの意味に於て一般者に於てあると云ふことができる、即ち一般概念の外延の意義を有つて居るのである。それによって何は何々であるといふ判断が成立するのである、判断は一般者の自己限定として成立するといふことができる。個物といふ如きものに至っては主語となって述語とならないと云はれる如く、述語的一般者に於てあるといふことは云はれないと考へられるでもあらう。併し個物といふものが考へられるのは一般者に於てあり、一般者の自己限定として考へられるのでなければならぬ。私は之を一般者の場所の自己限定といふのである。かかる意味の限定はどこまでも深めて行くことができる。個物といふのは尚主語となるといふ意義を有するであらう、変化といふ如きものに至っては主語として限定することもできないと考へ得るでもあらう。併しそれにしても尚どこまでも限定せられた一般者に於てあり、どこまでも有の場所的限定の意義を脱せないといふ得るであらう。時といふものが考へられるには、かかる限定せられた一般者の自己限定といふ如きものの外に出なければならない。無にして、自己自身を限定するものの自己限定として、無の場所的限定として、時といふ如きものが考へられるのである。時は無限に移り行くものと考へられる、併し時は単に変ずるものではない、或方向に向つて無限に移り行くといふことも、それだけにて時といふものは考へられるのではない。爾考へられる時、現在といふものはどこまでも、捕捉すべからざるものとなるのである。而も上に云つた如く現在といふものから過去と未来とが考へられるのである、過去から現在が限定せられるのではなく、現在が現在自身を限定することによって、過去と未来とが限定せられるのである、現在といふものなくして時といふものはない。かかる意味に於て現在が現在自身を限定するといふことは、限定せられた一般者の中に無限に変じ行くものを考へることによって可能なるのではなく、逆に限定するものなくして自己自身を限定するものの自己限定として考へられねばならぬ、時は自己自身に於て矛盾すると考へられる所以である。限定せられた一般者に於てあるものとして矛盾といふものは考へることはできない、唯無にして有を包むものに於て矛盾といふものが考へられるのである。現在として掴み得た時、それは既に現在ではない、現在は掴み

得ざるもの、矛盾は考へられないものと考へられるでもあらう。併し自己が自己自身を知る、即ち自覚するといふことは、無にして有を限定するといふことであり、そこにいつも現在が現在自身を限定するといふ意味があるのである。アウグスチヌスも過現未は心に於てであると云つて居る。自己が自己自身を知る所、そこに現在があり、現在が現在自身を限定する所、そこに自己があるのである。自己の底には何物もあつてはならぬ、何物かが自己を限定すると考へれば、自己といふものはなくなる。現在の底には何物もあつてはならぬ、何物かがあつたと考へれば、過去が現在を限定することとなり、時といふものはなくなるのである。嚮にすべて有るものは一般者に於てあり、判断的知識は一般者の自己限定として成立すると云つたが、逆に一般者の自己限定といふのはその根柢に於てすべて自覚の意義を有つて居るといふことができる。ノエマ的なるものが主語的なるものであり、一般者の自己限定として判断が成立するといふのは、自己が自己に於て自己を見るといふことを意味するにほかならない。唯、無にして自己自身を限定するもののノエマ的自覚として、それが客観的と考へられるのである。それで個物を包む場所的限と考へられるものは無の自覚的限定の意義を有つたものでなければならぬ、個物といふ如きものは我々の自覚に基づいて考へられるのである、個別的判断の基にはいつも直覚的なるものがなければならぬ。アリストテレスの如く主語となって述語とならない個物に眞理の根柢を求めるといふことは、眞理が無の自覚によって基礎付けられることを意味するであらう、アリストテレスのいう如き意味に於て定義とはロゴスの自覚的内容を意味すると考へることができる。それで現在が現在自身を限定することによって時といふものが成り立ち、現在が現在自身を限定すると云ふには、無が無自身を限定するといふことがなければならぬ、そこに我々の自覚の意義がなければならぬ。無にして自己自身を限定する一般者の自己限定として即ち絶対無の自覚的限定として時といふものが考へられるのである。すべて一般者の自己限定と考へられるものは絶対無の自覚的限定によって基礎付けられ、これによって包まれると考へることができるが、絶対無の自覚的限定としては、無にして自己自身を限定するもの、即ち自己自身を限定する現在といふものが限定せられるのである。而も眞に自己自身を限定する現在といふのはつかむことのできない瞬間といふものであり、絶対無の自覚的限定として自己自身を限定する瞬間といふ如きものが限定せられるのである、それが我々の自由なる人と考へるものであらう。絶対無の場所的限定として自由なる人といふ如きものが限定せられ、それは無にして自己自身を限定するものとして、我々の自己は自己の中に時を包み、各人は各人の時を有つと云ふことができる。普通には永遠の過去より永遠の未来に流れ行く絶対時といふ如きものが考へられ、我々はこれに於て生まれこれに於て死に行くと思はれる。併し上にも云つた如く、かかる考へ方によって眞の時といふものが考へられるのではない。時は自己が自己を限定することによって、現在が現在を限定することから始まらねばならぬ、各人の自己のある所そこに各自の時といふものがあるのである。我が時に於てあるのでなく、時が我に於てあるのである、絶対時といふ如きものは考へられたものに過ぎない。絶対無の自覚のノエシ的限定として即ち場所的限定として、まず無にして自己自身を限定するものが限定せられる。眞に無にして自己自身を限定するものといふのは、自由なる人といふべきものであらう。絶対の無によって限定せられるものは自由なる人といふ如きものでなければならぬ。此の如き意味に於て無にして自己自身を限定する

ものは、自己の中に無限の辯證法的運動を包む圓の如きものと考へることができる、自由なる人といふのは自己自身の中に時を包む圓環的限定といふことができる。パスカルは神を周辺なくして到る所に中心を有つ無限大の球 *une sphère infinie dont le centre est partout, la circonference nulle part* に喩えて居るが、絶対無の自覺的限定といふのは周辺なくして到る所が中心となる無限大の圓と考へることができる（パスカルの如く球と考へるのが適當かも知れないが私は今簡単に圓と考へておく）。これによって、これに於て到る所に無にして自己自身を限定する圓が限定せられると考へることができるのである。斯くして絶対無の自己も限定によってこれに於てあるものとして無数の人といふものが限定せられ、それぞれの現在を有つた無数の時といふものが成立すると考へることができる。すべての時を包み、現在が現在を限定する意味にて、すべての時を限定する絶対的現在ともいふべきものは、周辺なくして到る所に中心を有つ絶対無の自覺的限定といふことができる。かかる意味に於て絶対的現在と考へられるものはどこにても始まり、瞬間毎に新たに、いつでも無限の過去、無限の未来を現在の一点に引き寄せることのできる永遠の今といふことができ、時は永遠の今の自己限定として成立すると考へることができる。眞に永遠の今といふべきものはプラトンの考へた如き永遠不変の意味ではなくして、その各々の点に於て無限の過去無限の未来を消すことのでき、それに於てどこでもいつでも時が始まると考へることのできる絶対無の自覺といふ如きものでなければならない。プラトンのいわゆる永遠の世界といふ如きものもこれによってこれに於て限定せられるのである。周辺なくして到る所が中心となる絶対無の自覺面といふ如きものは、その各々の点に於て時が始まると考へられると共に、その各々の点に於て時が消されると考へることができる、絶対の生の面は絶対の死の面でなければならない。絶対無の自己限定はそのノエシ的限定の意味に於て無数の時を包み、これによって無数の時が成立すると考へられると共に、そのノエマ的限定の意味に於てはすべての時を否定すると考へることができる。すべての時を包むといふ意味に於て限定せられた絶対の現在といふものに於ては、時がなくなるのである。周辺なくして到る所が中心である圓の自己限定はすべてを包む無限大の圓と考へることができる。そこには動もなく生もない、それはもはや現在といふべきものでもない、そこでは時といふものがなくなるのである。唯、かかる無限大の圓といふ如きものが一我々のいわゆる対象界と考へて居るものが一絶対無の自己限定面であるといふことから、即ちそれが永遠の今によって限定せられた永遠の現在であるといふことから、絶対に無にして自己自身を限定するものの自己限定としていわゆる絶対時といふ如きものが考へられるのである、永遠の過去から永遠の未来に流れる絶対時といふ如きものが考へられるのである。併し上に云つた如く限定せられた一般者の自己限定として時といふものが考へられるのではない、対象界の自己限定としては時といふものは考へられない。時は無にして自己自身を限定する一般者の自己限定として考へられねばならない。而もかかる意味に於て絶対時といふものが限定せられるといふことは我々が瞬間の底に瞬間をつかむといふことでなければならない、つかむことのできない瞬間をつかむといふことでなければならない、周辺なき圓の中心が定まるといふことでなければならない、神の自覺なくしては不可能である。これに反し周辺なき圓の自己限定として無にして自己自身を限定する圓といふ如きもの、即ち自己自身を限定する現在といふものが限定せられ、つかむことのできない現在がつかまれるかぎり、時と

いふものが成立するのである。而して我々は真に無にして自己自身を限定するものとして、瞬間の尖端に於て真の時に触れると考へることができる、即ち絶対時に接すると考へることができる、個人の尖端に於て神に接するといふことができる、そこに内的事實即外的事實と考へられるのである。併し一旦現在が現在自身を限定すると考へられるならば、現在はどこまでもつかまれ行くと考へることができる、無のノエマ的自覺の方向にどこまでもつかまれた現在の自己限定といふ如きものを考へることができる、一般的自己の自覺的限定といふ如きものを考へることができるのである。無にして自己自身を限定するものの自己限定はどこまでもつかむことのできない瞬間の自己限定と考へられねばならぬが、それが自覺的に自己自身を限定し自己自身を見ると考へられるかぎり、そこに限定せられた現在の自己限定といふ如きものが考へられ、それに於てプラトンのイデアの如き永遠なるものが考へられるのである。かかる方向の極端に於て時なきものといふ如きものも考へることができるのであらう。

## 二

現在が現在自身を限定する所そこに自己があり、自己が自己自身を限定する所そこが現在である、永遠の過去より来たるものは此に来たり、永遠の未来に出てゆくものは此から出て行くのである、此に於て永遠の過去が消され、此に於て永遠の未来が始まると考へることができる。過去を消し過去を包むといふ意味に於てそれが理性と考へることができ、未来を始めるといふ意味に於てそれが自由意志と考へることができるが、限定するものなくして自己自身を限定するといふ意味に於て絶対に非合理的と考へることができる。かかる自己と考へられるものはどこに如何なる關係に於てあるものであらうか。

限定せられた一般者即ち有の場所といふ如きものから出立して、かかる一般者が自己自身の中に無限に自己を限定して行くと考へることもできる、換言すれば我々の対象界と考へるものはかかる一般者の自己限定と考へられるものであり、対象界と考へられるものが無限に自己の中に自己を限定して行くと考へることもできる。併しかかる考へ方を以てしては、上に云つた如く自己自身に矛盾するものを考へることはできぬ、従つて真の時といふものを考へることはできない。とは言え、斯く一般者が自己の中に無限に自己を限定して行くといふことは、既にそれが超越的なるものによって裏付けられて居ることを意味していなければならない、有が無の自己限定として無に於てあるといふ自覺の意味を有つていなければならない。絶対無限なる対象界の自己限定と考へられるものは絶対無のノエマ的限定と考へることができるであらう。絶対に無にして自己自身を限定するもののノエマ的限定は自ら絶対無限の過程とならざるを得ない、絶対無限なる対象界と考へられるものの自己限定の極限に於ては絶対無の自覺的限定に触れると考へることができる。かかる接触線に於て後者の立場から永遠の過去から永遠の未来に渡る絶対時といふ如きものが考へられるのである。いわゆる客觀的時といふ如きものは絶対無の自覺のノエマ的限定に沿うて考へられるものと云ふことができるであらう、即ち対象界の自己限定に沿うて考へられるものであらう。対象界に即して考へられるいわゆる歴史といふものは、かかる時の意味に於て考へられるものでなければならない。對象的限定といふ立場からどこまで自覺的立場に接近して行

っても歴史の立場に達することはできない、目的論的見方と歴史の立場とはその立場に於て区別せられなければならない。歴史といふものは、唯對象的限定を越えた無の自覺の立場に於てのみ考へ得るのである、故に歴史は辯證法的と考へられねばならない。併し我々の自己は単に歴史に於てあるのではない。對象的限定に沿うて考へられる歴史的時に於てはどこまでも現在に達することはできない、歴史的時には瞬間といふものはない。却つて現在が現在自身を限定するといふことから、限定せられた一般者を越えた無の自覺的限定といふものが成立し、かかる立場から對象的限定線に沿うて客觀的時といふものが考へられるのである。故に我々は絶對無の自覺そのものを有せざるかぎり、即ち神の自覺を有せざるかぎり、絶對時といふ如きものを限定することはできない。唯、行為的自己として絶對無の自覺のノエマ的限定の意義を有するかぎり、我々は歴史に於てあり、また歴史的時といふ如きものが行為的自己の自己限定の立場に於て考へられるのである。それで自己自身を限定する我々の眞の自己と考へられるものは、對象的限定に沿うて考へられる客觀的時といふ如きものをも越えてあるもの、即ち、歴史を越えたものでなければならない。我々の自由なる自己と考へられるものは、無限なる辯證法的運動を包む絶對無のノエシス的限定によって基礎付けられて居るものでなければならない、場所が直ちに場所自身を限定するといふ圓環的限定によって基礎付けられたものでなければならない。ノエシスの限定と考へられるものは、場所が場所自身を限定するといふ意味に於て圓環的限定として内に無限の辯證法的運動を包むものでなければならない。故に我々の自由なる自己と考へられるものは對象的限定に沿うて考へられる客觀的時の底に無限に深く自己自身を限定するものとして、即ち瞬間を包むものとして考へられるのである。歴史の底に自由なる個人的自己といふものが考へられるのである。

アウグスチヌスは自己は自己自身を知るのみならず自己自身を愛すると云ひ、また我々は知らないものを愛することはできないと云ふ。何故に自己は自己自身を愛することによって自己であり、如何なる意味に於て我々は愛するものを既に知って居ると云ひ得るであらうか。對象的に既に知られたものは求め得られたものであり、知らうとするものは未だ知られたものではないと云はざるを得ない。併し我々の自己は限定せられた一般者の自己限定として限定せられるのではない、有の自己限定として自己といふものがあるのではなく、無の自己限定として自己といふものがあるのである。先づ場所の自己限定と考へられるものがあり、これに於てこれによって對象的限定といふものが成立すると考へられる。斯く考へられるかぎり、いわゆる對象的限定と考へられるものは既に我々の自覺に於てあり、或る意味に於て知られて居ると考へることができる。我々は自愛に於て對象的に無なるものを愛するのである、知識的に知ることのできないものを求めるのである。而も求められるものが求めるものであり、愛せられるものが愛するものであるといふことから自愛といふものが成立し、無が無自身を限定するとして我々の眞の自覺といふものが考へられるのである。私のいわゆる場所が場所自身を限定するといふことは、積極的には自己が自己を愛するといふことであると云ふことができる。故に自愛といふのは場所自身の無媒介的なる自己限定として、絶對に非合理的といふことができ、我々の自己は自愛によって非合理的に自己自身を限定するのである。かかる自己限定が對象的には身體的限定と考へられるものであらう、自愛なき所に身體はなく、身體なき所に自愛はないのである。絶對に無なるものの自己限定として無の自覺と

考へられるものは無限の辯證法的運動と考へることもできるであらう。これに於てあるものは自己自身に於て矛盾するものと考へることもできるであらう。併し周辺なき圓の自己限定の意味に於て無の自覺といふのはかかる過程的限定を内に包むのみならず、之を越えて自己自身を場所的に限定すると考へることができる、無限の過程的限定はこれに於て消されるのである。到る所が中心となる周辺なき圓の自己限定としては、到る所に無数の圓環的限定が成立すると考へることができる、即ち、永遠の今の自己限定として到る所に現在が現在自身を限定すると考へることができる。そこには面と面とが相触れると考へることができる、絶対無の自覺の能限定面と所限定面とが相触れると考へることができる、死の面即ち有の面と生の面即ち無の面とが相触れると考へることができる、かかる意味に於て無の場所的限定といふべきものが自愛と考へられるものである。その所限定面即ち對象的有の面といふべきものが身體と考へられるものである、これに於てあるものは限定するものなくして自己自身を限定するものとしてすべて衝動的である。故に自愛のある所そこに身體があり、身體のある所そこが現在である。現在といふのは對象的限定から定まるものでない、我々の自己の自覺的限定から定まるのである。知識的に現在といふものが定められるのではなく、現在は自己が自己自身を愛する所に定められるのである。自己自身を限定する現在と考へられるものは自愛的自己と云つてよい、過現未を包む現在の自己限定と考へられるものは自愛的限定でなければならない。アウグスチヌスはこの三つのものは心に於てあると云ひ、それらを記憶と直観と期待とに歸して居るが、かかる三つのものの統一としての我は我自身を愛する我でなければならない。

以上述べた如くなるを以て、無の自覺的限定としてこれに於てあるものは、いつも二つの仕方に於て限定せられて居ると云ふことができる。或いは限定するものなくして自己自身を限定するものは二つの方向に於て自己自身を限定すると云つてよい。一つはノエマ的に自己自身を限定するものとして絶対無の自覺のノエマ的限定線に沿うて辯證法的に自己自身を限定するのである。之を直線的限定と考へることができる、いわゆる時間的に即ち歴史的に自己自身を限定するのである、かかる限定の意味に於て自己は行爲的と考へられるのである。もう一つは絶対無のノエシスの限定に沿うて圓環的に自己自身を限定して行くのである。自己自身を中心として辯證法的運動を包む意味に於て自己自身を無限大に拡げて行くと考へることができる。周辺なくして到る所が中心となる圓に於ては、到る所を中心として無限大の圓が成立すると考へることができる。周辺なき圓の自己限定として到る所に自己自身を限定する無の場所即ち自己自身を限定する現在といふものが成り立つ。それは無の自覺に於て限定せられたものとして辯證法的に即ち歴史的に自己自身を限定し行くと考へられなければならないと共に、場所自身の自己限定として超越的に自己自身を限定すると考へることができる、辯證法的運動を内に包み之を超越すると考へられねばならぬ。周辺なき圓の自己限定としてはかかるものが考へられねばならないのである。かかる意味に限定せられた場所と考へられるものが、上に云つた如く身體と考へられるものである。身體と考へられるものは純なる精神的限定として考へられるものでもなく、また純なる物質的限定として考へられるものでもない、唯無の場所的限定として即ち自愛的自己の自己限定として考へられるのである。つかむことのできない現在の底に考へられる個人的自己といふのは、自己自身を限定する或る一点を中心とし

た即ち自己自身を限定する瞬間を中心とした無限大の圓と考へることができるであらう。それで自愛といふのは周辺なき圓の自己限定と考へられる或る一点から、辯證法的運動のノエマ的限定線に沿うてどこまでも之を包むといふ意味に於て拡がり行く圓環的自己限定と考へることができる。併し（私は今此に自愛と他愛との關係について委しく論ずる暇はないが）他愛といふのは斯くして考へられるものではない、自愛と他愛とは正に相反する方向に於て考へられねばならない。社会愛、人類愛といふ如き他愛といふのは自愛の拡げられたものと考へられるであらう、いわゆる同情といふ如きものによって自己はどこまでも拡げられるものと考へることができる。併しかかる意味に於て拡げられた愛といふのはどこまでも拡げられた自愛であつて、眞の他愛ではない、ノエマ的限定線に沿うて之を包むべく拡げられた圓環的限定に過ぎない、唯自己自身を限定する現在が拡がって行ったまでである。眞の他愛といふべきものはこれと反對の方向に考へられなければならない。周辺なくして到る所が中心となる圓の自己限定と考へられるものは、一方にかかるノエマ的限定の意義を有つたノエシ的限定をも否定する意義を有つていなければならない、ノエマ的限定線に沿うた圓環的限定をも否定する意味を有つていなければならない、然らざれば単に無限大の圓の自己限定といふのと扱ふ所がないのである。我々が如何ともすることのできない絶大の自然といふ如きものに對した時、之を眞の客觀界と考へ自己もその一部に過ぎないと考へる。併し我々は或る程度までは自然をも手段として使用することができる、自己の意志の命令の下に置くことができる。

加之、もしカント哲學に於ての様に、自然界と考へられるものも純我の綜合統一によって成立すると考へるならば、自然界も或る意味に於て我に於てあると云ふことができるであらう。すべて理性的なるものは我々の意志を以て如何ともすることができないと云つても、尚自己に於てあるものと云ふことができる。唯、私に對して如何ともすることのできないものは汝である、眞に私に對立し、眞に客觀的といふものは自然ではなくして汝でなければならぬ。ノエマ的限定を没したノエシ的限定といふべきものは私と汝との關係でなければならぬ、周辺なき圓の自己限定として到る所に限定せられる圓と圓との關係は私と汝との關係でなければならぬ。周辺なき圓の自己限定として無数の圓が成立するといふことは人格が人格に於て成立するといふことを意味するであらう。而してどこまでも無が無自身を求め無が無自身を限定することが眞の愛といふべきものであり、自愛といふのも斯く考ふべきものであるとすれば、周辺なき圓の自己限定といふべきものは絶對の愛と考へることができ、絶對の愛によって私と汝とが限定せられると云ふことができる。眞の自愛は他愛であり他愛はその実自愛である、そこに汝自身の如く汝の隣人を愛せよといふ語の意義が理解せられるのである。對象的限定に沿うて自己自身を限定するといふ自愛からどこまで行っても他愛は出て来ない、而してそこに眞の人格的自愛といふものもないのである。眞の愛はかかる方向の否定でなければならぬ、故に眞の愛はケルケゴールが *Leben und Walten der Liebe* に於て云つて居る如く「汝は愛せざるべからず」である。私は右の如くノエマ的限定を越えた周辺なき圓の自己限定即ち場所が場所に於てあるといふ如き場所自身の自己限定の意味に於て、表現的限定といふ如きものをも見る事ができると思ふ。ノエマ的限定を越えた立場に於て客觀的なるものは、すべて汝でなければならぬ、我に對して立つ客觀的歴史といふものも汝でなければならぬ。併し歴史

はノエマ的限定線に沿うて考へられたものである、更にかかる限定をも越えた立場に於て客観的なるものは単に自己自身を表現するものとなるのである。

### 三

すべて絶対無の自覺的限定としてこれに於てあるもの、即ち眞に具體的有といふべきものは、上に云つた如く直線的と圓環的との二様の意味に於て自己自身を限定すると考へることができる。周辺なき圓が自己自身を限定すると考へられる時、まず無限大の圓として自己自身を限定すると考へられ、それに於て到る所が中心として無数なる無限大の圓が限定せられると考へることができる。かかる中心ともいふべきものが自己自身を限定する瞬間と考へられるものである、絶対に無なるものの自己限定として瞬間といふものが限定せられるのである、永遠の今の自己限定として到る所が今となると云つてもよい。併し一つの中心を有つた無限大の圓といふ如きものは、絶対無の場所的限定即ち周辺なき圓のノエシ的限定としてこれに於てあるものであって、そのノエマ的限定面といふものではない。周辺なき圓の自己限定面としては、どこまでも中心を否定する、中心のない圓といふ如きものが考へられねばならない。到る所が中心となる周辺なき圓はノエマ面としては絶対に中心否定の圓として自己自身を限定するのである。どこまでも中心のない絶対の死の面といふ如きものが絶対無の自覺のノエマ面と考へることができ、到る所が中心である絶対の生の面といふ如きものがそのノエシ面と考へることができるであらう。絶対無の自覺に於ては無が無自身を見るとして、映す面が映される面であり、この両面は一といふべきであるから、これに於てあるものはどこまでも辯證法的と考へられねばならない。両面の對立から云へば両面の接触する所に辯證法的なるものが成立すると考へることができ、辯證法的に自己自身を限定するものから云へば、自己自身は相反する両面に属するものとして、一方に絶対の死の面を望み、一方に絶対の生の面を見ると考へることができる、而も後者が前者を包み死が即生であるといふ所に、辯證法的なるものが考へられるのである。辯證法的運動といふのは唯ノエマ的に有が即無であるといふ如きことによって成立するのではなく、その根柢に無が無自身を限定する即ち場所が場所自身を限定するといふことがなければならぬ、私のいわゆる圓環的限定がなければならぬ。無の自覺として具體的有と考へられる我々の自己といふものがそれ自身に於て矛盾であり、辯證法的と考へられるのも、自己が自己自身を愛するといふことに基づかなければならぬ。単に知る自己より矛盾の起こりようもない、単に知る自己といふ如きものは眞の自己でないのである。自己の底には深い非合理的なるものがなければならぬ、非合理的なるものが合理的である、否、非合理的なるものの自己限定によって合理的なるものが成立することが辯證法的といふことでなければならぬ。眞の自己の存在はその理性的なるにあるにあらずして、その感官的なるにあるのである、その肉體的なる所にあるのである。而も単に肉體的なるものは物質と扱ふ所はない、唯肉の底に靈を見る所に自己といふものがあるのである。故に自己の存在そのものが矛盾である、理性的自己が理性的自己たるにも、その底に非合理的なるものがなければならぬ。理性的自己は希薄なる自己である。かかる意味にて肉の底に自己自身を限定する靈、否肉そのものを即靈となすのが眞の自愛的自己といふものであり、かかる自己の自己限定が自愛

と考へられるものである。而して自己自身を愛する自愛的自己の自己限定と考へられるものは無の場所の自己限定といふべきものでなければならない。感官的なるものが即靈的であるといふことは、それが無の場所的限定であって無の場所に於てあるといふことでなければならない、限定するものなくして自己自身を限定するといふことでなければならない、事實が事實自身を限定するといふことでなければならない、外が即ち内といふことでなければならない、非合理的なるものが即合理的といふことでなければならない。私が非合理的なるものの自己限定といふのは、何か知ることのできない深い或る物があつて、それが自己自身を限定するといふのではない、限定するものなくして自己自身を限定するといふことである。潜在的に不可知的なる或る物と考へられるものはオンに對するメ・オンたるに過ぎない、かかる考へそのものが事實が事實自身を限定する意味に於て成立するのである。それで我々の自己と考へられるものは場所的限定として即ち圓環的限定として成立し、而も周辺なき圓の自己限定として絶對否定の死の世界即ち絶對に中心否定の圓を自己限定面となすといふ意味に於て、辯證法的に即ち直線的に自己自身を限定すると考へられるのである。場所が場所自身を限定するといふ意味に於て絶對の死の面と生の面とが相触れると考へられる所に身體といふものが考へられ、そこに辯證法的に自己自身を限定する身體的自己といふものが成立するのである。それが相反する両面の間に於てあるものとして、その何の面に近づくかによって種々なる自己が成立すると考へることができる。その両端に於ては相反する意味に於て身體なき自己といふ如きものを考へることができるであらう、そこに我々の自己が自己自身の身體を失うと考へることができるのである。而しても絶對無の自己限定として具體的有といふべきものは、すべて我々の自己といふ如き意味を有つたものであり、辯證法的限定の相反する両端に於て、一は辯證法を否定する意味に於て一は之を包む意味に於て辯證法的限定を離れたものを考へることができる、即ち相反する意味に於て時なきものを考へることができる。抽象的有とか一般的自己とかいふ如きものはかかる意味に於て考へられるものである。

到る所が中心となる周辺なき圓の自己限定に喩ふべき絶對無の自己限定面即ちそのノエマ面ともいふべきものは中心なき圓と考ふべきであらう。無の場所的限定としてこれに於てあるものはかかる限定面に於て自己自身を限定すると考へることができる。それは所限定面と能限定面とに對して如何なる關係に於て立つであらうか。周辺なくして到る所が中心となる圓の自己限定としてこれに於てあると考へられるものは、或る一つの中心を有つた無限大に拡がる圓と考へることができるであらう。かかる中心が我々の個人的自己と考へられるものであり、そこに瞬間が瞬間自身を限定すると考へることができる、そこに自己自身を限定する時が成立すると考へることができる。かかる自己と考へられるものは中心否定の圓即ち絶對無のノエマ面からはどこまでも否定せられる、即ち自己自身の中心を失うと考へられると共に、またどこまでも之を包む意義を有すると考へることができる。時は永遠に消え行くと共にまた永遠に生まれ出るものである。自己はどこまでも對象界から限定せられると考へられねばならぬとともに、自己はどこまでも對象界を限定する意義を持って居る。どこまでも對象界を包むといふ意味に於てはそれは行為的と考へられ、どこまでも對象界から限定せられるといふ意味に於てはそれは感官的と云ふべきである。中心否定の圓即ち絶對無のノエマ的限定面から云へば、すべての

中心的限定は否定せられると云ふべく、私のいわゆる限定せられた一般者と考へるものはすべてこれによって裏付けられて居ると云はなければならない。限定せられた一般者の自己限定を破って無の自己限定として之を包む意味を有つて、これに沿うて考へられる時といふものは、つまり中心否定の圓の自己限定即ち絶対無のノエマ的限定に沿うて考へられるものでなければならない。而も時はどこまでもかかる圓を包むことはない、中心を有つた圓は中心のない圓を包むことはできない、中心的限定は非中心的限定からしてどこまでも否定せられると考へられねばならない。非中心的限定の立場からは自己自身を限定する現在といふ如きものはどこまでも否定せられて行く、我々の自己はどこまでも否定せられて行かねばならない。時は老い行くのである、我は死に行くのである、一瞬の過去にも返ることのできない永遠なる時の流れといふものは斯くして考へられるのである。併し非中心的限定と考へられるものは固到る所が中心である周辺なき圓のノエマ的限定に過ぎない。中心的限定はどこまでも非中心的限定によって消されるのではない。時はどこまでも蘇るのである、我々の一瞬一瞬が死であると共に生である、嘗に一瞬一瞬に蘇るのみならず圓環的限定として時を包む意味を有つのである、過去を翻す意味を有つのである、プラトンの如く瞬間は時の外にあると云ふことができる、背理的ではあるが未来が過去を限定すると云ふことができる。中心否定の圓の自己限定といふ如きものは、唯、到る所が中心である圓のノエマ面としてのみ考へられるのであるから、斯く云ふことができるのである。かかる意味に於て時を包んだ瞬間の自己限定といふべきものが行為と考へられるものであり、その底には圓環的限定として自己自身を愛するものがあるのである。而もそれが永遠の過去から永遠の未来に流れる時の限定に對して単に知的にして知覺的と考へられるのである。知覺的と云つても瞬間的限定の尖端に於て内的知覺即外的知覺として唯、事實が事實自身を知る事實感とでも云ふべきである。一つの中心を有つた無限大の圓として絶対無の自覺のノエマ的自己限定に沿うて考へられるものは以上の如く考へねばならないが、更に場所が場所自身を限定するといふ意味に於て場所の無媒介的自己限定といふものを考へることができる、即ち圓環的限定といふ如きものが考へられなければならない。所限定面即能限定面と考へられる時、死即生として辯證法的と考へられるであらう。併し辯證法的運動と考へられるものは固、限定するものなくして自己自身を限定する絶対無の過程的限定として成立するものであり、その根柢には絶対無の場所的限定として之を包む立場がなければならぬ。それが無が無自身を限定する絶対無のノエシス的限定として絶対の愛といふ如きものでなければならない、これに於ては辯證法的運動も消え行くと考へることができる。かかる絶対愛の立場に基礎付けられて抽象的な場所的限定といふものが成立すると考へることができる。それで無媒介的な場所の自己限定と考へられるものは、いつも愛の自己限定に基礎付けられねばならない、人と人との直接なる結合に基礎付けられねばならない。絶対無のノエシス的限定と考へられるものは、愛の自己限定といふべきであらう。つかむことのできない現在をつかむものは愛である、愛によってつかまれた現在といふ如きものが成立するのである。併してかかる現在の自己限定と考へられるものが我々に一般的自己と考へられるものである。我々に共通なる世界といふものが構成せられるには、その底に広義に於て社会的自己といふものがなければならない(社会我なくして現在といふものはない)。個人といふものを一つの中心を有つた無限大の圓と考へるならば、社会我と考へられるもの

は周辺の限定せられた圓と考へることができもるであらう。それで社会我といふものはいつも対象界を包む意味を有つて居る、即ち行為的意義を有つて居るのである。場所が場所自身を限定するといふ意味に於ては、一つの面が能限定面と所限定面との意味を有つていなければならない、一つの圓は両様の意味に於て限定せられていなければならない、両面の接触面と考へられねばならない。社会我は一種の身體を有つたものである、所限定面に即して考へられる自己限定の意味に於てはそれは歴史に於てあり、歴史によって基礎付けられると考へられねばならない、絶対無のノエマ的限定に沿うて考へられるノエシス的限定の内容が歴史と考ふべきである。併しそれが能限定面的限定としては即ち愛の自己限定としては、所限定面は能限定面の内に包まれこれに没入する意義を有し、そこに歴史を越え辯證法的運動を止揚する意義がなければならない。愛の自己限定に於て我々は歴史を越えて永遠なるものの内容を見るのである。愛の自己限定に於ては自己に對するものはまた自己として限定せられるのである、對象的限定が即自己限定となるのである、客觀が主觀の中に没入するのである。過現未を包む現在の自己限定とは、即ち無にして自己自身を限定するものの自己限定とは、場所が場所自身を限定するとして愛の自己限定といふべく、これに於て時を越え歴史を包むといふことができる、即ち愛の自己限定に於て我々は永遠に現在なるもの内容に触れると云ふことができる、かかる愛の自己限定を直觀と考へるのである。行為の底には自己自身を愛するものがなければならぬ、行為とは自己自身を愛するものの時に沿うた自己限定にほかならない。我々が行為によって時を包み得たと考へられる時、そこに直觀といふものが成立するのである、直觀は行為の自覺といふことができる。かかる直觀の内容が永遠に現在なるイデアといふことができる、イデアは愛の内容といふことができる(藝術は愛に基づくのである)。故に場所が場所自身を限定するといふ意義を有する社会我の自己限定の内容と考ふべきものは、何らかの意味に於てイデア的でなければならない、社会我の自己限定によってイデア的内容が見られると云ふことができる。そこにそれが歴史を越えてある意義があるのである。

愛に於ては自他合一し、他に於て自己を見るのである。絶対無の場所的限定たる絶対の愛に於ては、すべてが自己となり、すべてに於て自己を見ると云ふことができる、周辺なき圓の到る所が中心であると思へることができる。かかる限定に於ては、一方に時を包む意味を有するを以て、広義に於て行為とも考へられると共に、一方に物に於て自己を見ると云ふことができ、愛のノエマ的限定は直觀と考へることができる。愛の自己限定として自己自身を限定する場所が限定せられるといふこと、即ち有限なる圓環的限定が成立するといふことは、そこに一つの直觀が成立するといふことを意味すると考へることができる、絶対無の自己限定といふのは根本的には自己自身を見て行くことであると云ふことができる。いつもまた到る所に生まれる永遠の今の自己限定を絶対の愛と考へるならば、限定せられた今の自己限定と考へられるものは直觀と云ひ得るであらう。過現未を包む現在の自己限定といふのを愛の自己限定と考へるならば、現在が現在自身を限定するといふ意味に於ては、それを直觀と考へることができる。而してそれは永遠の今の自己限定として、そこに我々は永遠なるもの内容に触れると考へることができるであらう。それが時の充実と考へられるものでなければならない。時の充実の方向に於ては時がなくなるのではない、時が包まれるのである。眞に永遠なるものといふのは単に変ぜ

ないものと云ふのではない、現在が現在自身を限定する意味に於て内から自己自身を限定して行くものを意味するのである (Plotin, Über Ewigkeit und Zeit)。現在が現在自身を限定し行くといふ意味を有する行為に於て、我々が永遠なるものの内容に触れると考へられるのもこれがためであればならない。かかる意味に於て自己自身を見て行くといふことは個人的自己に於てその極限に達するのである、絶対無の自覺に於てあるものは一つの中心を有つた無限大の圓といふ如きものに至って、その極限に達すると考へざるを得ない、かかる極限に於て死の面即生の面として辯證法的限定といふものが考へられるのである。併し中心なき圓は到る所が中心である圓の限定面として之を包むといふもつ意義を有するを以て、更に之を越えた立場といふものを考へることができる。かかる辯證法的運動を包むといふ立場に於てノエシス的方向に自由意志といふ如きものが考へられると共に、そのノエマ的方向に中心なき圓の限定面的内容として単なる表現の世界といふ如きものが考へられるのである。後者に於て自己といふものはない、それは無自覺の世界である。自由意志の底に我々は時を越えたもの、即ち神に接すると考へ得るならば、表現の方向に於ては時がなくなると考へることができる。中ごと心なき圓といふ如き絶対の否定面に於ては時とか自己とかいう如きものはなくなると考へざるを得ない、そこは絶対の死の世界であればならない。表現の世界といふのは死を以て覆われたる生の世界である。我々が行為的自己の立場から出立して自己自身を限定して行くと考へるならば、我々は如何ともすることのできない對象面に撞着すると考へざるを得ない、そこに我々は我々の自己を失うと考へるのである。併し行為の底には自己自身を愛するものがなければならぬ、行為的に如何ともすることのできないものも愛の範囲に於てあると云ふことができる、即ち欲望の對象界に於てあると考へることができる。行為的自己の自己限定の立場から云へば、物が欲望の對象となると考へることもできるが、逆に對象界からは愛の對象界の中心と考へられるものが自己であり、行為とはかかる對象界の自己限定と考へることができる。上に云つた如く愛とは物が我であり、物に於て我を見ることである。アウグスチヌスの如く我々は知らざるものを愛することができないとすれば、愛に於ては物が既に我に於てあり、物の自己限定が我の自己限定と考へることができる。かかる考へを推して、行為的自己が自己自身を失うと考へられる時、即ち中心を有つた無限大の圓の中心が中心否定の面によって消されると考へられる時、中心なき圓の自己限定として表現の世界といふ如きものが成立するのである。かかる世界の成立にはその底に他愛がなければならぬ。行為的自己の自己限定といふのは自愛と考へられるものであり、行為的自己が自己自身を失うと考へられる時、我々は他愛に入るのである。前に云つた如く他愛は自愛の拡げられたものでなく、その否定の方向にあるのである。對象的限定線に沿うて之を包むべく考へられたものが自愛であり、かかる方向を否定して汝を包むのが他愛である。眞に對象界を自己の内に見る時、對象界が自己の中に没すると考へられる時、更に自己に對するものはもはや物ではなく汝でなければならぬ。かかる對立に於いて私がなくなると考へられるとき、全てが汝である。場所と場所との對立は私と汝とでなければならぬ、絶対の愛の立場からは中心否定の圓と考へられるもものも汝の意味を有つたものでなければならぬ。自愛的自己が自己自身を失うといふことは他愛に入るといふことであり、他愛に入るといふことは自愛の方向を否定する絶対の愛の立場に結び付くことをカや意味するのである。斯くして中心のない圓が無自覺的と考へ

られる表現の野といふ如きものとなるのである。唯、場所が場所自身を限定する意味に於て、いわゆる他愛的自己の自己限定として、広義における社会的自己即ち一般的自己といふものが成立するかぎり、それが過現未を包む現在の自己限定即ち愛の自己限定として、これに於て時が充実して行くと考へられるのである、永遠なる今の自己限定としてイデア的なものが見られるのである。表現的自己の自覺的限定といふのはかかる意味に於て考へられるものでなければならぬ。我々の思惟的自己と考へられるものは無自覺的な表現面が自覺的意義を有つ所に成立するのである。それは自覺的意義を有つた無自覺的な表現面の自己限定ともいふべきであらう、ノエシス面的限定としてはそれは行為の意義を有つと考へることもできる。併しそれは愛を中心とした社会的自己の自己限定といふ如きものではない、むしろそれを否定する意味を有つたものと云ふことができる、それは絶対愛のノエマ的限定に裏付けられたものと考ふべきであらう。

絶対無の自覺的限定といふものをそのノエマ面的限定から見れば、絶対時の自己限定と考へられるであらう。限定せられた一般者を越えて無にして自己自身を限定するものを考へる時、それは中心なき圓の自己限定とも考ふべきものであらう、これに於ていわゆる客觀界と考へられるものが限定せられる。併しノエシス面的限定としてこれに於てあると考へられる我々の自己はかかる限定面に於てあるのではない、之を越えてあるものである、時によって限定せられるのではなく、かえって永遠の今の自己限定として時を限定するのである。絶対時と考へられるものは、唯、死即生なる時の否定的方向に中心を置いたものに過ぎない。絶対無の自覺的限定として真に具體的有と考ふべきものは、永遠の今の自己限定たる我々の個人的自己といふものでなければならぬ。その一々が一つの中心を有つた無限大の圓として自己自身を限定すると云ふべきである。故に我々の自己はいわゆる歴史に於てあるのではない、唯ノエマ的に歴史に於て自己自身を限定するのである。すべて絶対無の自覺的限定としてこれに於てあるものは、その限定面に於て自己自身を限定すると考へねばならない、我々の自己はそのノエマ的限定に沿うて絶対時に於て自己自身を限定すると考へられるのである。単なる限定面的内容としてはいわゆる自然といふものが考へられるであらう。身體的自己としては我々は自然に於て自己自身を限定し、また自然によって自己自身を限定せられると考へねばならぬ。併し行為的自己としては歴史に於て自己自身を限定するのである。以上は絶対無のノエマ的限定の立場から見たのであるが、即ち知識的見方であるが、そのノエシス的限定の立場から見れば、即ち情意的見方よりすれば、私に對するものは汝でなければならぬ、すべての對象的關係は私と汝との關係でなければならぬ。現在が現在自身を限定するといふことが自己が自己を限定することであるといふのは、自己が自己を一つの人格として限定するといふことでなければならぬ。私が一つの人格として自己自身を限定するかぎり斯く云ひ得るのである。真に無と無とを結合する無の自己限定と考へられるものは人格的統一でなければならぬ、直線的限定を包む圓環的限定といふのはかかるものでなければならぬ。それで絶対無のノエシス的限定によって基礎付けられた私といふものから見れば、絶対無のノエマ面といふものは汝といふものでなければならぬ。而もそれは絶対無のノエマ面として絶対に私を否定する意味を有つたものでなければならぬ、かかる意味に於て表現の世界といふ如きものが考へられる。それは私に不可知的な汝であり、或いは未だ自覺せない客觀的自己である。併し中心のない圓は固、到る

所中心たる圓のノエマ面としてこれに於てあるものでなければならぬ、かかる意味に於てはそれは大なる客観的自己でなければならぬ。いわゆる意識一般といふ如きものもかかる意味に於て考へられるものであらう。それは表現的自己の自覺と考へることもできる、到る所中心である圓がそこに始めて自己自身をも圓環的に限定すると考へることができる、即ち自己自身を見る意味を有つて来ると云ふことができる。かかる限定も圓、絶對的愛の自己限定によって基礎付けられるものとして、この私と同じく一の自己であり、私に對して汝の意味を有つたものでなければならぬ。併しそれはノエマ的限定として全然知的であり、その内容は單に自然と考ふべきものである。身體的自己としては我を殺すに一滴の水を以てして十分であるが、一つ的人格としては全宇宙を以てしても我は之を知る故に殺すものよりも貴いといふことができる、而も兩者共にノエシ的限定としては、絶對的愛に於ては、我と自然とは兄弟でなければならぬ。ノエシ面がノエマ面を包むといふ意味を有つた時、表現的自己が自覺的となり、意識一般の意味を有つて来ると云つたが、更にノエマ面がノエシ面の内に包み込まれ、無が無自身を見るといふ意味を有つた時、表現的自己の自己限定と考へられるものは社会的自己の意義を有つて来なければならぬ、即ち人格的意義を有つて来るのである、それは私に對して汝である。それは絶對無のノエシ的限定の意義を有するノエマ面として我々をノエマ的に限定する意味を有すると共に、我々の自己はノエシ面的限定として我々は社会に對して自由であり、かえって社会は我々によって構成せられると考へることができる。更にノエマ面がノエシ面の中に没入したと考へられる時、そこにもはや社会的自己といふ如きものもない、汝として私に對するものは唯、神である。我々は個人的自己の尖端に於て自由意志として直ちに神に接するのである。ノエシ的には斯く神に接すると云ひ得ると共に、ノエマ的には社会的制約を離れて自己と同一の自由なる人を見る、人と人と相對するのである。ノエマ面的限定として汝といふものがなくなる時、ノエシ即ノエマとなる、我々は各々の人に於て神を見るのである、汝自身の如く汝の隣人を愛せよといふ声もそこから出て来るのである。かかるノエシ的限定の世界を一つの社会と考へるならば、それは神の国といふべきものであらう、カントの目的の王国といふ如きものも斯くして考へられるものでなければならぬ。かかる絶對無のノエシ的限定に對してそのノエマ的限定と考へられるものが歴史の世界といふ如きものである、社会我と考へられたものは此に於て歴史我の意味を有つて来るのである、ノエマ的には我々はこれに於てありこれによって限定せられると考へられる。而も絶對無のノエマ的限定として歴史の底に無限に非合理的なるものがある、歴史をも消すものがある、かかる絶對の死が絶對的愛に於て絶對の生であると考へられる所に神の国といふ如きものが考へられるのである。對象的認識の立場としては我々はノエマ的限定から考へるのであるが、ノエマ的限定はいつもノエシ的限定によって基礎づけられていなければならぬ。絶對無の自覺の最も根本的なるノエマ的限定の内容と考ふべきものは自己自身を限定する事實といふ如きものであらう、原始歴史の事實といふ如きものであらう。到る所中心である圓の自己限定の内容と考ふべきものは此の如き非連續の連續の事實といふ如きものでなければならぬ。ノエマ的にはその底に絶對に非合理的なるものを考へなければならぬ、それは未だいわゆる自然といふ如きものではない。而もそれが絶對に非合理的なるが故に絶對に無であり、絶對に無なるものの自己限定として、それは絶對的愛といふべきものでな

ければならない。そこではノエシス即ノエマとして、それは未だ自然でもなければ汝でもない。併しそれが絶対の自覚としてその自己限定の内容が自己自身を限定する事実そのものと考へられるのである、それは私のいわゆる原始歴史の事実といふ如きものでなければならぬ。我々は自然に於て非合理的なるものに撞着すると考ふべきではなく、歴史に於て真に非合理的なるものに撞着するのである。かかる意味における事実の世界はノエマ的に自己自身を見る意義を有し、而もそれが見られないと考へられる時、いわゆる歴史といふものが考へられ、それと共に上に云つた如く自然といふ如きものも考へられ、更に社会といふ如きものも考へられるのである。此等のものはすべて原始歴史の世界の自己限定の意義を有つて居るのである、絶対無の自覚の両面の間に挟まれて居るといふことができる、そのノエマ面的方向にイデヤが見られ、その底にノエシス即ノエマとして自己自身を限定する事実が見られる。イデヤとは事実の自覚的内容たるに過ぎない、それは限定せられた現在の内容として非実在的と考へられるが、その底にはいつでも自己自身を限定する今の自己限しか定として事実的なるものがなければならぬ。而してかかる事実を限定するものは絶対無の自覚に接するものとして、我々の個人的自己といふ如きものでなければならぬ。個人的自己と考へられるものは絶対無の場所に於てある最後のものとして、それから見てそのノエマ的方向とノエシス的方向とに一般的自己といふ如きものが見られるのである。

#### 四

上より述べて来た如く永遠の今の自己限定によって絶対無の自覚の對象界が限定せられるとすれば、そのノエシス的限定と考へられるものは絶対の愛の自己限定と考ふべきであらう。辯證法的運動の背後には之を包むものがあるのである、之を止揚するものがあるのである。すべて無の自覚に於てあるものはその背後に圓環的限定がなければならぬ、即ち場所が場所自身を限定するといふ意味がなければならぬ。それが愛の自己限定といふべきものである、物の存在性はこれによって限定せられるのである。絶対愛の自己限定によって人格的世界といふものが限定せられ、これに於てあるものとして無数の個人的人格といふものが限定せられるのである、個物といふ如きものもかかる限定によって基礎付けられるものでなければならぬ。愛の限定といふ如きものによって認識對象を基礎付けると考へるのは知識の客観性と相容れないと云はれるでもあらう。併し場所が場所自身を限定するの意味なくしていわゆる意識現象といふものを考へることはできない、すべて精神科學的知識の成立の根柢には多少ともかかる限定の意義を考へねばならぬ。加之、自然科學的認識を基礎付ける自己自身を限定する事実そのものといふごときものも、かかる限定によって基礎付けられるといふことができる。非連続の連続として事実そのものと考へられるものは、かかる限定の内容でなければならぬ。斯くして認識對象の世界から藝術、道德、宗教の對象界への推移も考へることができるであらう。従来あまりに知情意の抽象的區別に捕へられて、具體的なる物の見方といふものが疎にせられて居るではないかと思ふ。自己自身を愛するといふことなくして自覚といふ如きものはない、愛の自己限定によって具體的對象といふ如きものが限定せられるのである。ヘーゲルの辯證法といふものは物の具體的見方といふことができるが、私は更に愛

の自己限定を加えることによって之を完全にし得ると思ふのである。

記憶なくして我といふものはない、併し記憶は如何にして成立するのであろうか。記憶の内容は固、連続的でなければならない。併しかかる連続は如何にして可能であるか、昨日の我と今日の我とは如何にして結合するか。かかる結合の根柢をほかに求めれば脳の存在に求めるのほかはない、併しそれは唯、一種のヒュステロソ・プロテロンたるを免れない。之を内に求めればライブニッツの極微知覚の如きものを仮定するのほかはない、而もそれは単なる仮定たるを免れない。記憶といふものは無の自己限定によって成立すると考へざるを得ない、私のいわゆる圓環的限定によって成立すると考へることができる。かかる限定に於て直線的連続が限定せられ、それが我々の内的連続と考へられるのである。記憶に於て既に非連続的なものの連続といふ意義がなければならない、単なる事實の連続と考へられるものがこれに於て限定せられるのである。かかる記憶の底にあつて無にして自己自身を限定すると考へられるものは何であるか。それは自愛的自己と考へられるものでなければならない、自愛的自己といふ如きものが記憶を限定しまたその想起の方向を決定するものでなければならない。我々はかかる自己を本能的と考へ自愛的自己の底に非合理的なるものを考へる。併しかかる非合理的なるものの自己限定によって人格的自己といふものが考へられるのではない。人格的ならざる自己はない、我々は我々の人格的自己を愛するのである。かかる自己の底には、合理的なるものもこれに於て限定せられるが故に、非合理的と考へられるものがなければならない、それが私の無の自己限定と考へるものである。今日の我に對する昨日の我、否今の瞬間の我に對して前の瞬間の我も独立の人格である。現在の自己が過去の自己を決定するのでもなく、過去の我が現在の我を決定するのでもない、その間に互いに相限定するものがあつてはならない、もしそういうものがあつたならば人格的統一は成立しない。昨日の事實も絶対の事實であり、今日の事實も絶対の事實でなければならない、我々は各瞬間に於て独立であればあるほど、一つの人格と考へられるのである、個人的人格の内にもカントのいわゆる目的の王国の意味がなければならない。互いに独立なるものの結合なるが故にそれは直接と考へられ、かえつて内面的統一と考へられるのである。人格とは主として理性的に行爲するものとして考へられるが、独立なるものと独立なるものとの直接の結合は愛といふものでなければならない、人格的統一の底にはかかる愛の統一がなければならない、かかる愛の底から理性的行爲と考へられるものも起こるのである。記憶と考へられるものは、かかる意味における自愛的自己のノエマ的限定と考へることができる、過現未を包む現在の自己限定として記憶といふ如きものが成立するのである。記憶に於ては非連続の連続の意義がなければならない、分離的であればあるほど、記憶的に統一せられて居るといふことができる、記憶に於ては我々は個々の事實に従うのであり、個々の事實に従えば従うほど記憶は明らかであるのである。想像とか思惟とかに於ての如く何らかの意味に於てノエマ的に統一が見らるるかぎり、それは記憶ではない。かかる無統一の統一、そこに真に内面的自己の統一といふものがあるのである、我々が真に内面的自己の統一として記憶的統一と考へるものは分離的統一と云ふべきものである。内的感官と考へられるものは個々の事實を見るのである、それは眼なくして見る眼である。内的感官と考へられるものの尖端に於て我々は絶対に非合理的なるものに撞着するのである、絶対の否定に撞着するのである。而もそこから蘇るのが想起

である、かかる否定の肯定として個々の事実が分離的に統一せられるかぎり、自愛的自己といふものが考へられるのである。更に自愛の意義が自即他の他愛の立場にまで深められる時、愛によって客觀的事實の世界が限定せられると考へることができる。アウグスチヌスがすべてが記憶に於てであると云ひ、廣大無辺の奥の院 *penetrabile amplum et infinitum* と云つたのも斯くして理解することができる。

我々は単なる事實といふものを考へる。そしてそれを非合理的と考へる、はなはだしきはそれ自身に何らの形式を有たない質料の如きものとも考へる。併し普通に事實と考へられるものでも、何時、何處でといふように時間空間の形式に當てはまったものでなければならぬ。加之、少なくとも經驗科學と考へられるものに於ては、我々はどこまでも事實に従わなければならない、事實に合するといふことによつて知識の客觀性が立せられるのである。無形式にして単に非合理的と考へられる事實が如何にしてかかる意義を有つことができるであらうか。我々に對して與へられると考へられるものは、何らかの意味に於て、我々の主觀との關係に於て與へられねばならぬ。盲に對して色は與へられない、聾に對して聲は與へられない、與へられるものは求められたものと云ふことができる。併し我々の視覺作用が色を生ずるのでもなければ、色が視覺作用を生ずるのでもない。色は色自身の體系を有つ、その體系と考へられるものは分類的體系といふ如きものであらう。併しそれが私に對して與へられると云ふには、即ち私といふものと何らかの關係に入ると云ふには、それが自己自身を限定する意味を有たねばならぬ、少なくとも広義に於て「有る」といふ意味を有つたものでなければならぬ、ヒポケーメノンの意味がなければならぬ。併しヒポケーメノンとして與へられるといふならば、それは我々の思惟に對して與へられると云ひ得るかも知らぬが、見る私に對して與へられるとは言えない。それは作用するものではない、作用するものと考へられるには、それが自己自身の内から無限に自己自身を限定して行くと考へられねばならぬ、一つの具體的一般者と考へられねばならぬ。併し斯く考へられた時、それが如何なる意味に於て私との關係に入るか。単に斯く考へられただけでは、そこに我々の視覺作用といふ如きものは考へられない。而も色の一般者の自己限定といふものを離れて視覺作用といふ如きものは考へられない。唯、一般者の自己限定として主語的方向に考へられるものを述語的方向に考へることによつて、即ちヒポケーメノンを裏返すことによつて、視覺作用といふ如きものが考へられるのである、場所の自己限定として意識作用といふ如きものが考へられるのである。それで我々に對して或る物が與へられるといふのは、我といふものがあり、或る物といふものがある、後者が前者に對して與へられるのではなく、唯、無にして自己自身を限定するものがあるといふことである、有るものが辯證法的に自己自身を限定すると云ふことでなければならぬ、その自己肯定の方向が物と考へられ自己否定の方向が我と考へられるのである、肯定的有に對する相對的無が我と考へられるのである。感覺がインデックスとして與へられるといふのも、此の如き意味でなければならぬ。マールブルク學派の如くそれが極微として単に生産点といふ如きものであったなら、それから事實の世界、眞の實在の世界は構成せられない。共立 *compossible* の世界が構成せられるには、それは自己自身に矛盾するものとして辯證法的に自己自身を限定するものでなければならぬ。無形式なる質料といふ如きものは與へられるといふ意味を有つことはできないのみならず、ギリシャ哲學に於て考へられた如く単なる無と考へるのほ

かないのであらう。我々に與へられるといふことは、無の自己限定として無に於てあるといふことでなければならぬ。無の自己限定として無に於てあると云ふことが所與の形式と考ふべきものである、その底には私のいわゆる圓環的限定の意義がなければならぬ。最も深い意味に於て所與の範疇と考へられるものは辯證法的でなければならぬ。之をそのノエマ的限定の方から見れば絶対に非合理的と云ひ得るであらう、併しノエシス的限定の立場から見ればそれは絶対に合理的と考へ得るであらう。非合理的なるが故に合理的、合理的なるが故に非合理的、そこに眞の辯證法的限定があるのである。いわゆる事實と考へられるものが非合理的として「我々に與へられる」といふには、非合理的即合理的といふことを意味せなければならぬ。単に非合理的なるものは単なる質料といふ如くそれは何物でもない。それが我々に與へられるといふ時、それが合理的といふことを意味せなければならぬ。普通に合理的といへば単なる思惟といふものを考へる、而してこれに對して非合理的なるものが與へられると考へる、併し眞に有るものとしては、単に非合理的なるものもなければ、単に合理的なるものもない、數學の如きものでも數學的直覺の事實に基づくといふことができる。形式があつて内容がこれに對して與へられるのでなく、形式と内容とは同時に與へられるのである。プラトンが。パルメニデスに於て云つて居るように「有るもの」は何かに於てあると云はねばならぬ、「於てあるもの」に對して「於てある場所」が形式と考へられるのである。自覺に於て自己が自己に於て自己を見ると考へられる如く、一般者が自己に於て自己に於てあるものを限定する。かかる意味に於てすべて有るものは何かに於てあるのである。而して場所が場所自身を限定するといふ意味に於て、圓環的限定として場所自身が限定せられるかぎり、限定せられた場所が形式として與へられたものと對立する。そこに主觀と客觀との對立といふ如きものが考へられるのである、限定せられた場所といふものが主觀と考へられるのである。併し有るものは、いつも無の自己限定として無に於てあるものとして、それ自身を辯證法的に限定するのである、無即有、質料即形相なるが故に辯證法的となるのである。唯、辯證法的運動を包む愛の立場に於て辯證法的運動が止揚せられると考へられるかぎり、形式と與へられたものが對立するのである。多くの哲學は無にして自己自身を限定する表現的自己の自覺的限定といふべき具體的なる辯證法的限定といふものから出立せないで、無媒介的なる場所の自己限定によって考へられる抽象的なる主客の對立から出立する。而して無のノエマ的自覺といふべき理性を主觀と考へ、これに對して非合理的内容が與へられると考へる。併し理性によって知識が限定せられると考へ、理性的限定が知るといふことであると考へるならば、それはもはや単なる論理的限定といふごときものではなくして、具體的一般者の自己限定といふごときものでなければならぬ。併して眞の具體的一般者の自己限定といふべきものは、無の自己限定として辯證法的でなければならぬ、カント學派の人々は經驗の内容が空間、時間と論理の範疇とに當嵌つて經驗界が成立すると考へるが、その綜合統一によって經驗界が成立すると考へられる意識一般と考へられるものは、私の考へでは最も深い意味に於て内的知覺といふ如き意味を有つたものでなければならぬ。そしてそれは無にして自己自身を限定するものとして辯證法的に自己自身を限定するものと考へねばならぬと思ふのである、斯くしてそれによって眞の客觀界が成立すると云ひ得るのである。斯く内的感官の自己限定によって經驗界が成立すると考へ得るが、内的感官は辯證法的に自己自身を限定するものとして、

固、行為的意義を有つて居る、前に云つた如く未来より過去を限定する意味を有つて居る、無が有を包む意味を有つて居る。かかる意味に於て有が無の中に没したと考へられる時、即ち辯證法的限定が場所自身の圓環的限定によって包まれたと考へられる時、そこに我々がかかる経験界を考へる立場といふものが成立するのである。絶対無のノエシス的限定の立場即ち愛の立場に於て辯證法的限定を包むと考へる立場に於て、我々が客観界を問題として之を考へ、之を知るといふことが可能となるのである。云はば意識一般を包む自己の立場に於て客観界が我々に問題となるのである。カントは客観界の成立の立場を明らかにした、併しそれが我々に問題となる立場について考へていない。そういう立場は上に云つた如く時が失われると考へられる表現的自己の自己限定の立場でなければならない。内的感官の對象として自己自身を限定すると考へられる事實と考へられるものが、絶対無の自覺のノエシス面に於てあると考へられる時、「於てあるもの」に對立して「於てある場所」といふべきものは對立的意義を有するだけ、それだけ限定せられた場所の意義を有し、それが行為的主観と考へられる。絶対無の場所に於てあるものに對して對立的に限定せられる場所が行為的主観と考へられるものである、故に行為的主観と考へられるものは主観の最後のものと考へることができる。かかる意味に於て限定せられた場所の自己限定と考へられるものが、行為的自己の自己限定と考へられるものであり、その自覺的内容がイデアと考へられる。併し絶対無の場所に於てあるものに對し、對立的に考へられる場所といふものはどこまでも行為的主観の意義を有つて居る、換言すれば行為的主観はどこまでも「於てあるもの」を包む意味を有つて居る。かかる主客對立の極限に於て行為的主観はノエマ的には思惟と考へられ、ノエシス的に自由意志と考へられる。行為的主観と考へられるものが「對立的に限定せられた場所」として、もはや「於てあるもの」を包み得ざる時、尚どこまでも包む意義を有するかぎり、それは自由意志と考へられ、それが包み得ると考へられるかぎり思惟と考へられる、後者のイデア的内容として眞理といふものが成立する。自己自身を限定する事實のノエシス的限定と考ふべき内的感官が行為的意義を有するかぎり、いわゆる意識一般といふ如きものが考へられるのである。それで自己自身を限定する事實が我々に對して與へられると考へられる時、これに對して我々の主観と考へられるものは行為的主観の意義を有つたものでなければならない。それはノエシス的には自由意志の意義を有つて居るが、ノエマ的には思惟の意義を有つて居る。與へられるものが後者に於てあると考へられる時、問題といふ意義を有つのである。かかる意味に於てコヘンの如く與へられるものは問題として與へられるものであり、與へられたものは求められたものといふことができる。單なる形式的な主観と考へられるものは認識主観の意義を有つことができぬのみならず、かかる主観に對しては與へられるなどと云ふことも不可能であらう。自己に對して與へられるものは自己の内から與へられるものでなければならない。内的感官と考へられるものが右に云つた如く行為的意義を有つ時、それは良心と考へられるものである。良心を有するものにして行為の善悪が問題となる如く、理論的良心を有するものにして與へられるものが問題となるのである。理論的行為的自己の自己限定として、これに於てあるものが問題となり、その自覺的内容が眞理となるのである。ウィンデルバントがロッチェの言を引いて避くべからざる循環論證は已むなく之を犯さねばならぬといふ眞の意義も此に求められなければならない。理論的良心あるものにして知識が問題となるのである、眞

の意識一般と考ふべきものは良心といふ如き意味を有つたものでなければならない。而して良心といふべきものはすべて然らなければならぬ如く、それは単に形式的と考ふべきものでなく、非合理的なるものの合理化として一面に創造的意義を有つていなければならない。範疇と考へられるものはそれが行為的意義を有するかぎり、その綜合統一の形式と考へられるのである、即ち「於てあるもの」に對して限定せられた場所の自己限定の形式と考へることができる。

知識は認識主觀の綜合統一から始まると考へられる。併し私は知識は永遠の今の自己限定として事實が事實自身を限定するといふことから始まると考へるのである、即ち分離的統一より始まると考へるのである。與へられたものは無形式なる雜多ではなくして、それぞれが絶對的に自己自身を限定するものでなければならぬ。それは統一を否定することによって自己自身を統一するものでなければならない、そこには否定的統一といふ如きものがなければならない。かかる統一が否定の肯定として辯證法的限定と考ふべきものであり、我々の知識は此に基礎付けられ、此に始まるのである。事實の命ずる所、我々は如何なる既成の形式をも棄てなければならない。我々の眞の自己といふものが絶對の無といふものであり、眞に有るものは絶對の無に於てあるとするならば、斯く考へざるを得ない。眞の自己の内的統一と考ふべきものは右の如き否定的統一でなければならない、即ち辯證法的でなければならない。我々は我々に直接なるものとして主客未分の藝術的直觀の如きものを考へ、またはベルグソンの純粹持續の流れの如きものを考へるが、それらは既に射影せられた自己の統一に過ぎない。眞の直接なる内的自己の統一はノエマ的方向にあるのではなくしてノエシス的方向にあるのである、而してそれは場所的統一といふ如きものでなければならない。藝術的直觀の如きものでも、その底に事實が事實自身を限定するといふことがなければならない。いわゆる認識主觀と考へられるものは、かかる場所的限定の自覺として、これに於て統一せる知識といふものが成立するのである。いわゆる認識主觀の綜合統一によって知識が成立するといふより、むしろ事實が事實自身を限定するといふことから認識主觀の綜合統一といふものが考へられるのである、凹面鏡に投射せられた光線が一つの焦点に集中すると一般である。無にして自己自身を限定すると考へられるかぎり、絶對無の空間は曲率を有つていなければならぬ、これに於てあるものはそれ自身に於て統一せる一つの對象界を形成するのである。単なる事實といふものがあって、形式が之を統一するのではない、自己自身を限定する今の自己限定として今が自己自身を限定することによって、即ち現実が現実自身を限定することによって、認識形式が定まって来るのである。感覺的内容として物理的事實が自己自身を限定することによって、物理的認識の形式が定まって来るのである、如何なる意味に於て今が今自身を限定するかによって種々なる認識形式が定まって来るのである。過現未を包む現在が自己の中に自己を限定する、その自己限定の焦点といふ如きものがいわゆる今といふものであり、それが時の自己限定であるかぎり、無にして自己自身を限定するものとして、その前後を照らす光点の如きでなければならぬ、即ち自己自身を限定する今でなければならぬ。かかる自己限定が最も深い意味に於て内的感官と考へられるものである。記憶なくして内的感官といふものはない、内的感官は過去を包む意味を有つて居る。普通に斯く記憶的なる内的感官によっていわゆる内界と考へられるものが限定せられると考へられるが、それでは単に可能的なる時が限定せられ

るまでであり、真に自己といふものは見られない。真の内的感官はコギト・エルゴ・スムとして、作用が作用自身を見る意味がなければならない。斯くして始めて我々の自己が時の前後を包むと考へることができる。アウグスチヌスの如く我々は記憶することを記憶し、記憶も記憶に於てあると云ひ得るのみならず、忘れることも記憶に於てあると云ふことができる。かかる内的感官の直観によっていわゆる内部知覚の事實といふものが限定せられるのである。併し無の自己限定としての内的感官の限定によって、いわゆる内的事實の世界が成立するとするならば、内的感官は既に外的感官の意義を有つたものでなければならない。自己を見るものは自己を越えたものでなければならない、永遠の今の自己限定として感官と考へられるものには、固、内外といふものはないのである。無の自己限定として非合理的なるものに撞着するといふ意味に於ては、かえってすべて外的とも考へることもできる。かかる外的感官にまで記憶的意義を付加すればアウグスチヌスの如くすべてが記憶に於てあると云ふことができ、またプラトンの如く知ることは想起であるとも考へることができる。感官とは固、無の自己限定面ともいふ如きものであって、内的事實の世界といふ如きものは、かかる限定面に於て一つの中心を有つた限定せられた圓といふ如きものに過ぎないであらう。こういう意味に於ては感官といふのは一般に良心といふ如き意味を有つたものと考へることができる。良心といふのは理性的と考へられるが、非合理的なるものが即合理的であるといふことが良心的直観といふことである、直観的なるものが直ちに立法的であることが良心の声と考へられるものである。単に理性的なるものにも、また単に非理性的なるものにも、良心の声といふものは聞かれない。非合理的なるものの底に聞こえる理性の声、肉の底に聞こえる霊の声が良心の声である。良心の声に従うといふのは単に理性的となることではなく純なる情意の要求に従うことでなければならない、唯、考へられた自己を棄て居ることである、私欲を離れることである、無にして自己自身を限定するものとなることである、永遠の今の自己限定の内容は広義に於て良心の声として現れるのである。良心的直観といふ如きことは従来、単に行爲についてのみ考へられたが、直證的知識については云ふまでもなく、物理的知覚の如きものであっても、それが立法的意義を有もするかぎり、それは良心的意義を有つたものでなければならない。物理學者はどこまでも物理的事實のす良心的直観に従わなければならない、これがためには如何なる理論も棄てなければならないのである。オンに對してメ・オンが立つのではない、メ・オンに對してオンが立つのである、我々の眞の自覺はオンの方にあるのではなくしてメ・オンの方にあるのである。知識成立の根柢には絶対に非合理的なるものの合理性といふものがなければならない。良心の声は神の声である。かかる意味に於いて絶対無の場所に於てあるものに對して、相對的に限定せられた場所にしてどこまでも之を包む意義を有つたものが知的主観と考へられるものである。而して斯く限定せられた場所が同時に限定する場所の意義を有するかぎり、いわゆる直證的知識といふ如きものが成立するのである。我々の知識の世界は理論的良心によって、藝術の世界は藝術的良心によって、道德的世界は道德的良心によって成立する。その底にはいづれも事實が事實自身を限定するといふ意味がなければならない、しか永遠の今の自己限定の意味がなければならない。而してそれは絶対無の自己限定として、即ち絶対に非合理的なるものの合理化として、ノエシス的には絶対の愛といふ如きものでなければならない。愛に於ては、我々は自己を否定することによって自己を肯定

するのである、死することによって生きるのである、愛は非合理的なるものの合理化といふべきである。ケルケゴールの云ふ如く眞の愛は義務であり、良心の事であると云ふことができる。事實が事實自身を限定する瞬間の自己限定に於て、永遠の今の自己限定として、永遠なるものに触れる所に、良心的直覺があり、絶對的愛の内容があるのである。而して絶對愛の立場に於て辯證法的なるものを包むと考へられるかぎり、永遠の価値の世界即ちイデアの世界が見られるのである。神の立場に立たざるかぎり我々は辯證法的なるものを包むといふことはできない、絶對無の場所に於てあるもの即ち辯證法的に自己自身を限定するものに對して、限定せられた場所が對立すると考へねばならない。かかる場所的限定の内容としてイデア的なるものもとが見られるのである。併しかかる對立的に限定せられた場所の立場即ちいわゆる行為の立場は固、辯證法的に自己自身を限定するものを包むといふ意義を有しながら之を包むことができないのである。

唯、どこまでも之を包むといふ意義を有するかぎり、その極限に於てノエマ的に意識一般といふ如きものが考へられ、ノエシス的に道德的主觀といふ如きものが考へられるのである、而して之を包み得るかぎり藝術的主觀といふものが成立するのである。併しこれらの主觀の世界はそれ自身に於て成立して居るのではなく、その底に辯證法的に自己自身を限定する感覺と愛との世界がなければならない、即ち事實が事實を限定するといふ事實の世界のあることを忘れてはならない。

昭和六年 [一九三一]六月